

MAÎTRES du TEMPS

CHAPTER ONE

「時計を作るのではなく、時計をめぐる物語を創りたい」。物語は6章から成る。
そしてスティーブン・ホルツマンは第一章の主人公に当代の名時計師3人を選んだ。
協調も不和も物語には欠かせない。しかし時計が刻む心地よい音が物語を締めくくる。

ひとりの男の心意気が
編み出した
夢の時計の物語



「チャプター・ワン」の開発、製作に携わった3人の時計師。右からクリストフ・クラレ氏、ピーター・スピーク・マリン氏、ロジェ・デュビイ氏。

Photo/Maitres du Temps



「チャプター・ワン」。18Kレッドゴールド・ケース。18Kレッドゴールド製デブロワイヤント・バックル付きアリゲーター・ストラップ。価格4158万円（右の18Kホワイトゴールド・モデルは参考商品）。

Photo/Takenari Aoki (WPP)

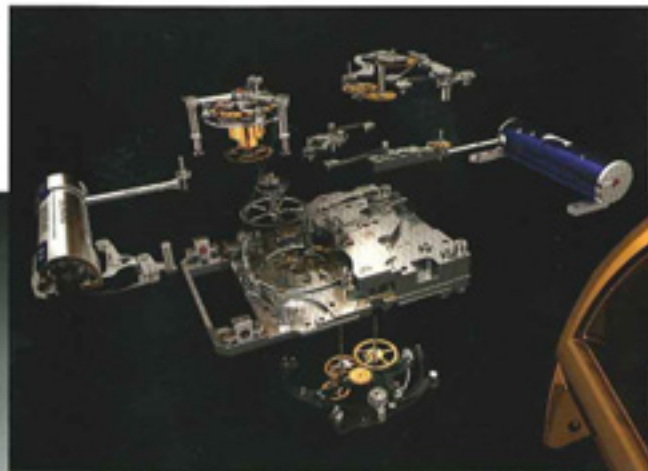
北米でスイス高級時計を扱うヘルベティア・タイム・コーポレーションのオーナー、スティーブン・ホルツマン氏が30年にわたる時計販売のキャリアを経て次のステップとして選んだことは自らのブランドを創設することだった。しかもそれは斬新かつ賢沢、そして野心的なコンセプトに基づいていた。今日、活躍する複数の時計師やエンジニアの共同作業としてひとつの時計を完成させることだった。ブランド名を「メイトル・デュタン（時の匠たち）」と名づけたのもそのためだ。その第一作「チャプター・ワン」が完成し、2月初め、東京で発表された。

チャプター・ワンの開発、製造はスイス時計業界のベテラン時計師ロジェ・デュビイ氏、イギリス人時計師のピーター・スピーク・マリン氏、そして複雑時計開発で知られるスイス人時計師クリストフ・クラレ氏の3人によって行なわれた。まず'05年からロジェ・デュビイ氏とピーター・スピーク・マリン氏によって開発・設計が始まり、'07年末に製造に向けてクリストフ・クラレ氏が参加した。開発にあたってホルツマン氏が求めたことは「ローラーを回して日付を変える昔のカレンダーの



ピーター・スピーク・マリン氏、チャプター・ワンの開発、製造にあたって意見の調整役でもあった。「このプロジェクトで学んだことは“外交手帳”と“忍耐強さ”かもしれません」と笑う。

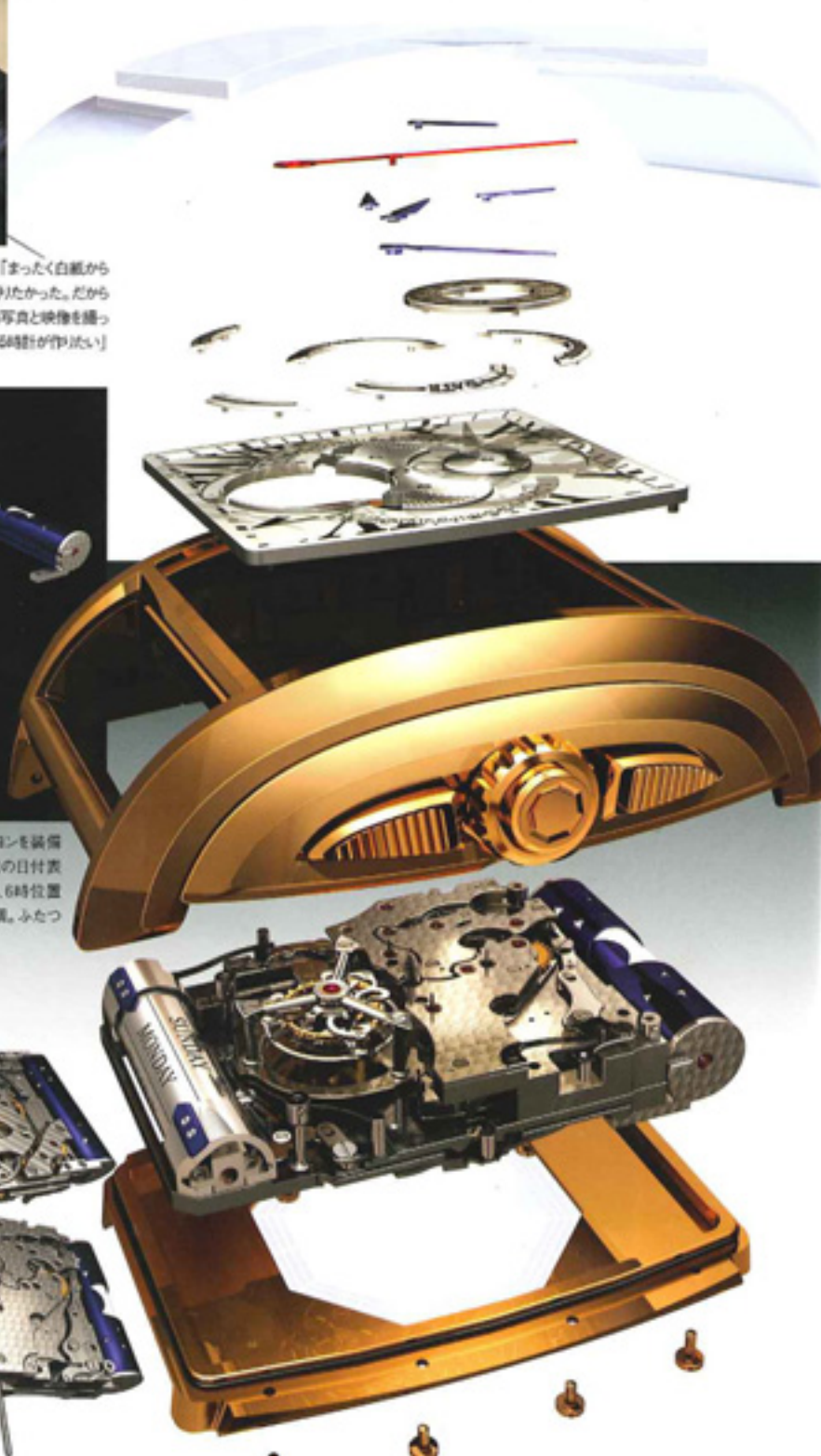
スティーブン・ホルツマン氏。「まったく白紙から始めてひとつのストーリーを創りたかった。だから後に語るために最初から記録写真と映像を撮っています。驚けていてうれしくなる時計が作りたい」



ムーブメントの文字盤側の裏面図。6時位置に1分間に1回転するトゥールビヨンが装備するコラムホイール式の手巻きモノプッシュャー・クロノグラフ。レトロград式の日付表示とGMT表示。また12時位置側にローリングバーによるムーンフェイス表示。6時位置側にローリングバーによる曜日表示を備える。ムーブメントの部品点数は550個。ふたつのローリングバーには90度の角度で動力が伝達される。

大きくカーブした縦62.6mm、横45.9mmのレクタンギュラー・ケースは104製の部品で構成される。黒染、裏蓋ともに両面無反射コーティングのサファイアクリスタル。ケース・サイドには4つのコレクターが付き、2時位置で日付、4時位置で曜日、8時位置でムーンフェイス、10時位置でGMT表示の修正が可能。文字盤は18Kゴールド製で7個の部品で構成され、サンレイ・パターン・のギョウジュ彫りが施される。クロノグラフ針は赤、他の針はブルーステール。

チャプター・ワンに搭載される手巻きムーブメント、Cal.SHC02。下の写真は文字盤側。ムーブメント・サイズは縦51.3mm、横31.6mm、毎時2万1600振動。パワーリザーブ約60時間。58石。クリスタフ・クローレ社で製造された。



日本でも発表される予定だ。

現在、「チャプター・シック」までのプロジェクトが企画されている。ロジェ・デュブイ氏、ピーター・スピーク・マリン氏、そしてダニエル・ロート氏の手で進められている「チャプター・トゥー」は、6月には

ような機構を備え、ケースはカーブしたレクタンギュラー」だった。ホルツマン氏はメートル・デュ・タンの時計がもつDNAとしてローリングバーを選んだのだ。ローラーで何を表示するかはさまざまなアイデアが出たが、チャプター・ワンではムーンフェイスと曜日表示が採用された。こうして3年の歳月を経て写真のチャプター・ワンが完成した。トゥールビヨンはクリストフ・クラレ製をベースとする。

「カーベックス・ケースにローラーを入れ、しかもエレガントな時計を開発することは至難の技でした。また各表示を調整するコレクターの開発が問題でした。世代が異なる3人が同じレベルで仕事をすることはむしろ難しく、意見のぶつかりあいは多い。しかし尊敬と対話があるから解決策が生まれる。このプロジェクトで共同作業の妙味を知りました」と発表に際し来日したスピーク・マリン氏は語った。